

2015年度国際研究集会

2015年11月22日(日)

発表会場：早稲田キャンパス14号館 ①401 ②402 ③501 ④502

◆タイムスケジュール

	第1会場 【401】	第2会場 【402】	第3会場 【501】	第4会場 【502】
10:00～	「Style」と「文体」の 交差 (パネル代表) 服部徹也	在日朝鮮人文学の 再検討にむけて (パネル代表) 呉世宗	「笑い」の近代、そ の解体と創造 (パネル代表) 鈴木和佳子	思想・社会・政治から 読む日本近代女性 詩歌 (パネル代表) キャロル・ヘイズ
12:30	ティーブレイク①			
13:15～	ユーリア・オサドチャ	李佳	趙夔羅	ガブラコヴァ・デンニツ ツァ
13:55	休憩			
14:00～	金裕美	李承京	劉婉明	時渝軒
14:40	ティーブレイク②			
15:25～	リュウシュ・マルクス	金東僖	林姿瑩	康潤伊
16:05	休憩			
16:10～	金宙賢	鄭守娟	陳童君	
16:50	休憩			
16:55～	ザベレジナヤ・オリガ	洪金珠	アギー・エヴァマリア	
17:35	◎終了予定			

【午前】 パネル発表 10:00～12:30

第1会場「Style」と「文体」の交差

服部徹也 長瀬海 Christopher Lowy 栗原悠
(ディスカッサント) 坪井秀人

(要旨)

「非母国語」として日本語の書籍を読む者にとって、「Style」についての理解はどのような変容をこうむるだろうか。「正書法」(orthography)がないといわれる日本語での多様な文字選択の集積、読者への教育装置ともいふべきルビなどからなる総体をこそ「文体」と呼ぶならば、そこには「Style」とは異質の問題領域が開けている。とりわけ日本語表記の構造的な転換の舞台としての近代文学においては、「文体」そのものが統制と抵抗の戦場であったとも言える。こうした「文体」のパフォーマンス性は、「Style」の多義性に包摂可能だろうか。本パネルではこうした「Style」と「文体」の交差というテーマを、多角的に検討していきたい。

服部徹也は、夏目漱石の『英文学形式論』(1924)における「Style」の扱いを取り上げる。まずは講義(1903)の受講生ノート四人分を漱石没後に纏めたという同書の本文を、現存する別の受講生ノート(金子健二・岸重次・森巻吉)に遡ることで再検討する。これらのノートから見つかる刊本にない記述を考慮に入れたうえ

で、英文学の「Style」鑑賞の困難を出発点とした同講義における「非ネイティブ読者としての漱石」の学問スタイルについて考察する。

長瀬海は、2014年に刊行されたジョン・ネイスンによる夏目漱石『明暗』（1916）の英訳 Light and Dark を取りあげる。ネイスンは『明暗』を翻訳する際に、ヘンリー・ジェイムズ的な精密さ（Jamesian precisions）を用いることで、漱石特有の密度の濃い内面描写それ自体を英語で再現しようと試みた。ネイスンが漱石の中に発見したこの Jamesian precisions とは何かを解明しつつ、訳者の批評性が翻訳という表現にどのように反映されているのかを分析することで、漱石が『明暗』で作りあげた「文体」が、日本語から離れ、英語に移される時に新たに獲得される「Style」の多義性について考察したい。

クリス・ローウィーは、〈構築〉という視点から日本語の書き言葉を考察する。日本語書籍の「文体」と文字は、〈非・ネイティブ書記言語〉読者に特に強い「美学」的体験をもたらすと考えられる。そうした読者にとっての特異な体験を成り立たせるものの一つは、日本語書き言葉でしか存在し得ないルビであろう。そこで、ルビによって戦略的に〈構築〉された非標準的な「文体」からなる横山悠太『吾輩ハ猫ニナル』（2014）をとりあげて、テキスト内のルビが果たす役割を分析し、日本語という書記言語空間の〈構築〉におけるルビの役割の普遍性を論じてみたい。

栗原悠は、島崎藤村の「感想文」について考察する。「感想文」はその量、質から言って藤村の文業の中でも重要な位置を占めると考えられる。しかし、それは長らくの間、飽くまでも小説を解釈するための補助線として扱われてきたきらいがあり、近年、永瀬朋枝氏の書誌情報整理などによってようやく再検討の素地が形成されてきた。そこで、藤村がとりわけ多くの「感想文」を発表した1920年代に焦点を当て、「文体」という視点を介して同時期の小説との比較を試みる。そして、それが「島崎藤村を読む」という営為についてどのような役割を担っていたのかを検証し、「文体」受容のあり方の一側面を示したい。

以上の四名に加え、「日本（語）」のみならず様々な国や言語を横断しながら研究展開を続けている坪井秀人氏をディスカッサントとして迎え、さらに議論を深めることを目指す。最後に会場を交えた討議へと開く。願わくは、日本内／外の研究「スタイル」間の対話を試みることで、一つの「スタイル」の創出でありたい。

第2会場 在日朝鮮人文学の再検討にむけて

呉世宗 郭炯徳 Cindi Textor

（要旨）

崔孝徳は、在日朝鮮人作家の文学を「戦後の日本において一方的に歴史化され、忘却と否認の中にあつた東アジアにおける戦前・戦後の帝国主義と民族問題への干渉、すなわち一つの歴史的实践として出現した[...]」ものだと規定している。この規定自体は、在日朝鮮人文学を語る際、最低限踏まえるべき規定であろう。

そのもう一方で、この規定を拡張すべく、在日朝鮮人文学の新たなとらえ返しが求められてもいる。第一には、抵抗としての在日朝鮮人文学の起源に金史良を位置付け、その抵抗精神を戦後金達寿が引き継ぎ再スタートさせたという文学史観が挙げられるだろう。二人の文学者がどのような抵抗を示したのかは、各作品ごとの丁寧な読みが求められる。のみならず金史良から金達寿へという図式は、戦前から戦後へという直線的で連続する時間を想定している。しかし「戦後」とは何かは、それ自体で問題含みである以上、「戦後」をどう規定するかによって抵抗の意味も、したがって在日朝鮮人文学とは何かも変わってくるだろう。

第二には、在日朝鮮人文学を日本語文学だとする規定である。確かに在日朝鮮人文学と呼ばれる作品群は、日本語で書かれたものが多い。またその日本語が異質であることも、なかば定説となっている。しかし詩人の姜舜のように、朝鮮語で書くことを使命のようにした文学者も存在しており、またとりわけ1950年代は何語で書くかという議論が激しく交わされた時代でもあった。つまり「在日朝鮮人文学」は少なくとも二つの言語、あるいは二つ（以上）の言語が混ぜ合わさって書かれた文学作品群であると捉えるべきであるし、朝鮮語だけで書かれた作品の発掘、その意義についての検討はすぐにでも行われるべき課題となっている。朝鮮語作品も含めて在日朝鮮人文学を検討することは、日本文学や韓国・朝鮮文学に包摂しきれない、その特異性をあらためて際立たせることになるだろう。

第三に、女性の書き手についての問題がある。柳美里、李良枝、宗秋月などの文学者は商業的にも成功し、またよく読まれるもする。しかし彼女たちが登場する以前の朝鮮人女性たちは、多くが文盲に苦しみ、また家事・育児に追われペンを握ること自体が困難な状況に置かれていた。その意味で「在日朝鮮人文学」とは、ある時期まで主に男たちの世界であった。したがってジェンダー的な観点を、それは作品内の女性の描かれ方に対してだけではなく、作品の書き手の問題に対しても持ち込み検討する必要性が生じている。加えて文盲

であった女性たちが、何語を学んだのか、あるいは学ばざるを得なかったのかも在日朝鮮人文学自体のアイデンティティとの関係で重要な論点となるだろう。

第四に、各作品が示す在日朝鮮人のアイデンティティ問題と「在日朝鮮人文学」自体のアイデンティティの問題がある。在日朝鮮人文学の多くは、確かに在日朝鮮人のアイデンティティをめぐるテーマが多い。そこに歴史認識問題や言語問題も重ねあわせられ、重層的な世界を描き出す実践ともなっている。そのように各作品が示す歴史認識、記憶、アイデンティティ、言語（日本語／朝鮮語）などの特異性が、いわゆる日本文学との違い、あるいは日本文学への抵抗として機能していることは間違いない。とはいえ、そのような反発・抵抗を示す一方で、在日朝鮮人文学は独特の引き寄せ、結びつきの力も持っている。例えばそれは済州島の1948年の虐殺事件とそれを描く文学との関係であったり、また世界各地の「マイナー文学」と呼びうる作品との繋がり、そして抑圧されるマイノリティの歴史との重なり合いである。そのような在日朝鮮人文学が持つ磁力を、他のマイナー文学作品や出来事との比較の中で検討する課題が残されている。それは在日朝鮮人文学の新たな可能性を開くものであるだろう。

上述した在日朝鮮人文学の再検討は、持続的で協働的な研究を必要とするものであるが、本パネル研究はその一部を担うものである。郭炯徳は金達寿「族譜」を通じて、この作家の戦前から戦後の連続性と断絶性を、そして彼にとっての「戦後」の意味を問う。Cindi Textorは、金石範における言語とアイデンティティの結びつきのあり様を主に作品「鴉の死」と評論「言語と自由」を用いて解き明かしつつ、日本文学との関係において在日朝鮮人文学のアイデンティティを問う。そして呉世宗は金時鐘の詩（主に『新瀉』）を沖縄と結びつけつつ、在日朝鮮人文学が持つあらたな可能性を開くことをめざしている。討議の際には、ジェンダーの問題にも触れる予定である。

第3会場 「笑い」の近代、その解体と創造

鈴木和佳子 高野真理子 ケン・シマ
(ディスカッサント) ジョーダン・スミス

(要旨)

明治以降、日本の近代化の流れとともに「笑い」を学問として研究する試みが行なわれてきた。例えば、坪内逍遙は文学者の立場から「笑い」に関する論を数編執筆し、明治時代は笑いが少なくなったことを嘆きつつ、「滑稽」や「笑い」を肯定した。また、当時の知識人たちは翻訳を通して、西洋近代思想に基づいた「笑い論」を学び、科学的な「笑い」の研究を展開した。本パネルは、こうした「笑い」研究の発展を踏まえつつ、「笑い」をさまざまな歴史/文化的現象として幅広い意味で捉え、「笑い」を批評の実践という枠組みから検証する。明治以降の近代化の過程において、権力/イデオロギーにより文学/芸術が制度化されていくなか、風刺、パロディ、揶揄、アイロニーといった多様な「笑い」の形態はいかにして、批評的な読みのモードを提示しえたのか。本パネルでは文学がそれ以前の形態と袂をわかち、「近代文学」として急に制度化していった明治期、更には文学/芸術と社会の関係が問われた昭和前期に注目しながら、「笑い」が近代文学という制度に対してどのような批評性を持ち得たのか検証する。

以下報告者の概要を記す。まず、ケン・シマの「滑稽の再来『滑稽新聞』の政治性」は、明治期の“低級”刊行物に見られるアイロニー、ゴシップ、言葉遊びなど、多様性と間テクスト性に満ちた意味形態に着目する。

1900年を挟んだ前後約10年、法体系・議会政治の言語、そして表現の透明性を担保する言文一致こそが政治表現に最も適しているとされ、それ以外の表現形態は「自然に」淘汰されていったと言われてきた。しかし、この通説は再考を要する。本発表では宮武外骨(1867-1955)が主宰した『滑稽新聞』を中心に、アイロニー、諷刺、視覚的遊戯、漢文、でたらめといった様々な表現の形態の持つ政治性を検証し、それらが天皇を頂点にしたネーションステートの意味体系の強化から逸脱する読みのモードであったという仮説を検証する。鈴木和佳子の「最後の戯作者というアイロニー、文学の制度化のパロディー—斎藤緑雨の評論作品を中心に—」は、仮名垣魯文の門下生である斎藤緑雨が、明治期における文学の制度化をどのようにパロディー化していったのかを検討する。従来までの研究では緑雨は最後の戯作者とも言われ、その江戸文学趣味を指摘されてきた。しかし、言語の形式こそが文学テクストにおいて最重要だと信じた緑雨のパロディーは、明治戯作をそのまま受け継ぐものではなく、形式(フォルム)に対する観念(アイデア)の優位を自明の理とする当時の文学の制度化に異議申し立てをするものであった。ここでは、緑雨がパロディーを駆使した評論作品「小説八宗」(1889)等を分析することで、緑雨がどのように形式としての文学言語の意義を訴えていったかを明らかにする。

高野真理子の発表「1940年代に於ける内在的批判としての「笑い」-花田清輝と中村光夫を例にして」は、花田清輝「笑の仮面」(1940)と中村光夫「笑ひの喪失」(1948)における「滑稽」「陳腐」をキータームとした、文学制度に対する内在的批判を検討する。花田と中村は「陳腐」が生み出す笑いを積極的に肯定するが、これはそもそも陳腐であることを禁ずる制度としての文学が内包する滑稽である。芸術的表現ではなく陳腐な「紋切り型」の実践にプロパガンダへの対抗を託す花田、戦後状況を悲劇としてとらえることを批判して喜劇の実践を唱える中村に共通するのは制度としての文学/芸術が持つ政治性への意識であり、本発表では両者の言葉と現実の切り結ぶさまに対する批評的な視線に注目する。

最後に、Global Comedy and Humor Theory (Routledge 社 2016年刊行予定)の著者であるジョーダン・スミスがディスカッサントとして参加し、パネル全体を総括しながら「笑い」と文学/芸術の関連性を議論する。「コメディ」と「ユーモア」に関するグローバルな理論を紹介しながら、発表者による「笑い」の考察を、日本国外における「笑い」の理論とどのように切り結ぶ事ができるか、時代や領域を超えた「笑い」の理論と実践の射程など、会場の参加者も交えてディスカッションを行う。

第4会場 思想・社会・政治からよむ日本近現代女性詩歌

—三ヶ島葎子から新井高子まで

キャロル・ヘイズ エリス俊子 菊地利奈 新井高子 川野里子

(要旨)

本パネルでは、5人の発表者(研究者3名、詩人1名、歌人1名)が、日本近現代女性詩人・女性歌人の作品にあらわれる女性の声の多様性に注目し、家庭・母性・セクシュアリティといった、女性詩歌と関係の深いとされてきた視点からだけでなく、これらの詩歌を社会・思想・政治をふまえた視点からよみとくことを試みる。

昭和文学において女性の果たした役割は絶大であり、女性詩歌研究は1970年代からフェミニズム研究の発展にともない急速にすすんだが、しかしなお、文芸誌『女人芸術』(1928~1932)で、家という概念に縛られる女性の存在を社会にしらしめる手段として詩歌という表現法を選び発表した女性詩人・歌人ら、プロレタリア詩運動に参加し社会で不当に扱われる女性の姿を訴えかけた女性詩人・歌人ら、感情や叙情を排除したモダニズム詩運動に参加し北園克衛ら男性詩人とともに活躍した女性詩人らなど、戦前に活躍した女性詩人・歌人らの研究はすすんでいるとはいえない。また、戦中に愛国的なプロパガンダ詩を書いた女性詩人・歌人らについての研究も、同時期に同様の詩歌を書いた男性詩人の研究に比べると大幅に遅れている。

戦後文学研究にいたっても、女性詩歌は女性性やフェミニズム的視点から研究されることが多く、結果として、カテゴリーにあてはまりにくいがために評価がさだまっていない女性詩人・歌人がうまれてきてしまっていないだろうか。

本パネルでは、これらをふまえ、三ヶ島葎子、左川ちか、斎藤史、永瀬清子、安立スハル、吉原幸子、栗木京子、高木佳子、平田俊子、新井高子 などのカテゴリーにあてはまりにくい作品に注目しながら、そこにあらわれる女性像・女性の声(訴え)に注目し、作品をよみとく試みをおこなう。

本パネルで扱う多くの作品は、日本近現代女性詩歌の日英対訳アンソロジー出版プロジェクトから取られたものであり、日本語と英語、両言語のインターセクションを意識したものである。パネリストには国内外の研究者を含み、発表者に研究者だけでなく、詩人・歌人を含むことで、多面的な考察と議論を喚起することを目的とする。また、詩と短歌という「領域」をわけずに「ポエトリー」としてとらえ、女性によって描かれた女性像・女性の声の多様性を論じることで、各研究発表とその後のディスカッションを通して、新たな発見が期待できる。

【午後】 個人発表 13:15～17:35

(16:40より45分間ティータイムを予定)

第1会場 (401)

ユーリア・オサドチャ

近代日本文学の規範形成と『小説神髓』

近代日本文学の規範形成は、前時代の代表的かつ典型的な作品一覧を記述することにより、三上 参次、高津鋏三郎著『日本文学史』の出版と最初の日本文学全集の編纂という形で実現した。この事業は日本文学の模範的作品と作家を集成して、所謂アカデミック・レベルで日本のそれまでの文学を代表させようとしたものである。しかし、近代日本文学の目指すべき芸術規範は、記念碑的な坪内逍遙の『小説神髓』において最終的に確立されたと言ってよい。逍遙が取り上げた近代文学の概念やその論拠は言うに及ばず、この論文は日本文学についての最初の体系的かつ分析的な論考となった。坪内によって日本文学研究史上初めて小説の文体と構成、主人公のイメージやナレーションなど詩学の諸問題が俎上に乗ることとなった。『小説神髓』に見られる非官学的かつ批判的研究方法は、近代文学の改良化の問題と並んで、分析対象としての小説(文学)の構造と詩学を明らかにしたと考えられる。

金裕美

半井桃水「胡砂吹く風」における場所の意味

樋口一葉の対象としか知られていない半井桃水は、次々新聞小説を発表した当時の人気作家であったが、現在では高い評価されることなく本格的な研究もあまり行われていない。彼の「胡砂吹く風」は、外国を経験した日本の知識人が其の経験を生かして書いた本格的な新聞小説であるという点、朝鮮という東洋の国を主な関心事として小説の中で扱ったという点、樋口一葉に多き影響を与えた半井桃水の代表作であることを考えてみると再評価される必要があると考えられる。「胡砂吹く風」を本格的に分析する前に本稿では、この作品の舞台である‘釜山(慶尙道)’と‘漢城’が作品の中でどのような役割をはたしているのかについて考察する。

釜山(慶尙道)で滞在した時の主人公は個人的・伝統的事に主に関心を持ち、そのことを解決しようとしたが、漢城へ拠点を移動した後主人公は国家的・近代的に事により関心を持ち、解決しようとする。この場所による変化は当時の日・朝関係の変化を象徴的に伝えようとする桃水の意図があったと考えられる。

リュウシュ マルクス

近代文学における親鸞—倉田百三の場合—

親鸞像は日本の近代化にともなって変化した。それを研究するには、大きく三つのアプローチがあると考えられる。一つは僧侶による法話の分析をつうじたアプローチ、もう一つはアカデミックな仏教学的アプローチ、三つ目は作家が描いた親鸞像を対象とする文学的アプローチである。本発表ではこの文学的アプローチを採り、倉田百三の『出家とその弟子』(1916年)を取り上げて、そこに描かれている親鸞像を論じる。倉田に影響を与えたのはとくに『歎異抄』と『聖書』であるが、倉田自身も仏教についての解説本や、仏教信仰に立脚する生活についての論文を数多く残している。『出家とその弟子』の出版後は『親鸞聖人』(1936年初版、1940年『親鸞』に改題)という親鸞伝も著した。本発表では、『歎異抄』や倉田自身の論考を参照しながら、『出家とその弟子』と『親鸞聖人』に見られる親鸞像を、伝統的親鸞像の継承とそこからの乖離という二重の側面から考察する。そのうえで、近世と近代の親鸞像の比較を試みたい。

金宙賢

菊池寛「俊寛」論—俊寛の転生から見えてくるもの

菊池寛「俊寛」は大正10年10月『改造』に掲載された短編である。菊池は大正9年に「真珠夫人」で有名作家となっており、その後、いわゆる通俗小説を集中的に書くようになるので、菊池にとって「俊寛」は

最後の歴史小説であり、その後の自分の文学的立場を示している作品であるともいえよう。

俊寛の物語は『源平盛衰記』以来、謡曲や近松の浄瑠璃、馬琴の読本などで広く知られ、歌舞伎でも「足摺りの場」が有名であるが、菊池はその「足摺り」の場面以降を大胆に変え、島を開拓し逞しく生活するという俊寛の〈転生〉を作り出した。その人物像は当時「俊寛らしくない」「ロビンソンクルーソーみたいな人物」と評され、「俊寛」はあまり研究されてこなかった。

発表では、以前までの俊寛像の変遷を踏まえた上で、大正10年を前後して発表された倉田百三「俊寛」（大正9年2月『新小説』）、芥川龍之介「俊寛」（大正11年1月）と菊池の「俊寛」を比較し、菊池の俊寛像の特色を考察する。それから、プロレタリア文学側から発された「享楽主義」という批判をめぐる論争をもとに、その「足摺りの場」以降の俊寛の〈転生〉から見えてくる菊池の文学的〈転生〉を考察したい。

ザベレジナヤ オリガ

志賀直哉の文学における「リズム」の現象

本稿は白樺派の代表的な作家、志賀直哉の小説における「リズム」の現象を考察する。志賀直哉はその独特な簡潔な文体で日本で広く知られているが、西洋ではほとんど翻訳されていない。その日本人にしかみ認められないといえる志賀文学の魅力の謎を解くには「リズム」の概念が必要になると考えられる。

先行研究では志賀直哉のリズミカル文書について記述が多い他、志賀自身も作品の中心的な概念として「リズム」を挙げている。志賀のテキストを分析した結果、「リズム」は第一に、文章構造の要素として考えられると分かった。その意味で句読点によるセンテンスの区切り、短い文章、言葉の順番変更、頭韻法などによって文章全体の緊張が上がり、読者はリズムが感じられる。第二に、もっと重要なのは、志賀の芸術論の理想としての「精神的リズム」である。その意味で、作者は直接自分の「リズム」を作品の中に生かしていくのが創作の目的である。このように「リズム」は人間の血脈から作品の原動力となり、ほとんど生理的なリズムという意味になる。志賀は自分の小説の中にそのリズムの概念が実現できたからこそ、その独特な文章が成り立ったといえる。その「リズム」が読者に伝わる方法を見つけるのは志賀文学の翻訳の一番の課題であり、または筆者の将来の課題でもある。

第2会場（402）

李佳

国際的視野を導入した私小説の新研究 ―中国新文芸の受容解析を中心として

1907年、田山花袋の『蒲団』の出現により、日本の自然主義文学は、独自の傾向を持ち始め、告白性の強い私小説に変化してしまった。その後、百年を渡り、この日本固有の私小説に対し、その独自性に注目したり、あるいは日本の伝統文化との関連で考察したりする研究が多かったが、それらの研究の視点はほとんど日本に限定されていた。しかし、ドメスティックな文学の典型と看做されていた私小説が、実は国境を越えて中国で積極的に受容された。

そのため、本発表は、日本と密接な関連性を持つ中国の文学団体・創造社の「身边小説」に注目し、「身边小説」の作品群に含まれる私小説的要素を逐一精密に対照することで、従来等閑視された中国の近代小説の表現技法における私小説の役割を明確化したい。このように、日本独自の文学スタイルを国際的な視点から再検討を行い、その国際的な役割を明確化することによって、私小説を代表とする日本近代文学のインターセクションの解析を試みたい。

李承京

近代小説における悲劇性と女性 ―有島武郎の『或る女』と殖民朝鮮の女性雑誌における連載小説の繋がり

本研究報告は、近代日本を代表する作家の有島武郎の『或る女(1919)』テキストと同時代殖民朝鮮の女性雑誌における連載小説を中心に、反抗的キャラクターを持つ女性主人公の悲劇的人生物語が一つの力を持つ虚構として実際の女性再現に関わった有様を考察する。近代女性雑誌の読者層は19世紀末から急激に拡大するが、それには当時の文学作家たちが積極的に女性談論を広げ、自分が想像した女性を描く文学テキストを

活発に女性雑誌に発表していた時代的背景とも関わっている。その中で近代の数多くの作家たちは「女性」というテーマを上げ、幾つの典型的物語を成立させる。特に反抗的女性主人公の波乱満場な人生物語は、婦人雑誌での定番の物語構成の一つでもある。本研究報告は、このような典型的物語構成の代表的な形として有島武郎の『或る女(1919)』を提示し、当時の殖民朝鮮の知識人たちを中心に良心的文人として人気を集めた有島武郎の文学的影響の中で「悲劇的女性の人生物語」という形式を再生産した1920年代殖民朝鮮の女性雑誌における連載小説を考察する。そして近代的女性主体の生産に関わった近代小説言説の中で、性差に基づいた文化的構成物としての女性的特質(feminity)がどのように構成されてきたのかを確認する。

金東億

李箱の日本語詩における「宗教」と「女性」—「二人……1……」「二人……2……」「LE URINE」「狂女の告白」を中心に

本発表は、李箱(イサン、1910~1937)が書いた日本語詩を時代認識と関わって分析することを目的とする。李箱は植民地時代に生まれ、現在までも韓国モダニズムの先頭に立っている作家として知られている。李箱は1931年から1932年にかけて、日本語雑誌『朝鮮と建築』に28編の日本語詩を発表したが、それが今まで確認できる李箱の日本語詩の全てのものである。李箱作品の弱点として言及されるのは、李箱の作品には時代認識が欠落されていることである。特にハングル作品と比べ日本語詩はより難解であると言われる。本稿では今までの先行研究とは異なる観点から、李箱の作品に内在されている時代認識を論じてみたい。そのため、李箱の日本語詩4編「二人……1……」「二人……2……」「LE URINE」「狂女の告白」を取り上げ、李箱が植民地時代という時期に日本語で作品を書いた意味を探ってみるとともに、当時の揺れる近代の表象として「宗教」と「女性」の問題を扱っていることを分析しようとする。

鄭守娟

「伊豆」という文学的な場所 — 白石の詩と散文

この論文は、「伊豆」が詩人白石にどのような文学的空間的として認識されて「旅」に出たのかについて検討してみたいです。白石(1912-1996)に於ける「旅」は彼の詩を理解するために、非常に有用なテーマです。1930年代を代表する詩人の一人である白石は、1930年朝鮮日報新春文芸に短編小説が当選されデビューした直後、1930年から1934年まで日本青山学院の英語師範科で留学しました。彼が日本で残した作品は、二編の詩「伊豆國湊街道」と「柿崎の海」、そして一編のエッセイ「海濱手帖-犬、鳥、子供たち」が全てのもので、この作品は、タイトルから分るように、伊豆半島旅行をきっかけに書かれたものです。「伊豆」は当時の日本文人たちの作品執筆の背景や交流、療養の場所でした。白石の留学時代の日本文学授業と関連し、夏目漱石の作品の読書体験(修善寺の大患)、そして1933年に川端康成の小説「伊豆の踊子」が映画化された点などをもとに、白石に伊豆半島旅行がどのような意味があったかを綿密に分析する予定です。

洪金珠

谷崎文学における『金瓶梅』の影

「文章の天才」と言われている谷崎は、漢語などの駆使によって漢字文化圏に共通していた隠喩、影射および象徴的なものを用い、上手に我々の集合的無意識の記憶を呼喚してくれる。殷王朝の紂王の妃、妲己の足と狐變というモチーフを辿ってみると、それは、『水滸伝』、『西遊記』、『封神演義』、『紅樓夢』などの古典に出てくる所謂「狐狸精」である。特に『金瓶梅』の中に九尾狐狸精の潘金蓮は、漢字文化圏の人びとの無意識に潜んでいる太母そのものであり、母なるものの象徴と谷崎が考えていたことだろう。

狐憑き神経症の自己表象と思わせる谷崎文学は、一つの熟したよい鹽梅を発見したのである。それは、中国四大奇書の一つ『金瓶梅』の中によく隠喩される梅の味である。その鹽梅という言葉は、中国の儒教古典『詩經』からの出自である。原文は「若作酒醴，爾惟麴蘖，若作和羹，爾惟鹽梅。」日本語に譯せば「もし酒醴をつくらば、爾これ麴蘖たれ。もし和羹をつくらば、爾これ鹽梅たれ。」鹽梅というのは、非常に政治的と宗教的の二つの意味をもっていた。『金瓶梅』の筋を引いて書いた『封神演義』の第三十一回(章)も鹽梅による妖孽は喪ばされて、鹽梅で狐憑きを退治した晰である。

また、谷崎は太母との対決という自己実現プロセスとして、『不幸な母の話』の最後に「親殺し」と共に自己の再生を仄めかしていた。最晩年の『親不孝の思ひ出』、『夢の浮橋』、『陰翳礼讃』など、好い鹽梅だけで

なく、梅醬、梅枝、梅雨という梅と関係ある隠語を使い、さらに『金瓶梅』と同じ蠟梅という名前を女中に用い、甚だ梅毒という話題まで持ち出された。『金瓶梅』でも、女中の龐春梅はいつも情事の目撃者として、大奥の「鹽と醋をよく知っている」と言われているほど、『金瓶梅』に不可欠な春の梅という隠し味の存在であった。

『金瓶梅』の第二七回(章)に黄李子(巴旦杏)で「壺投げ」をするというサディズムの名場面があるが、ここでも梅とその類似する酸味をエロティシズムの隠語として使っている。また男主人公の西門慶が、潘金蓮との再会によい鹽梅を頼んだ王婆の商売は、何と梅湯というお茶屋さんであった。其れ以来、西門慶は、不倫の前に「三弄梅花」という歌謡を愛唱し、相手に梅湯、衣梅等の鹽梅をねだるのである。『金瓶梅』の原初バージョンと言われている崇禎本という原文の中に、「我們」(私達)は、の表記は、「我毎」になっていた。「我毎」というのは、「我々が人の母である」という解釈もできる。『金瓶梅』に出てくる纏足女性は、母から娘へ身体の改造によって母性の権柄を持ち、正妻から妾そして女中と、どんな女性でも母になるために凄まじい戦いを繰り広げる妖婦である。

谷崎の自愛自負作と知られる『夢の浮橋』、『親不孝の思ひ出』などは、『金瓶梅』の影が濃く、母なる妖婦のお御足、母系統から引いた「不孝者の血」など母なるもののテキストが、構造から象徴的な隠語の使い方まで『金瓶梅』と一致している。生涯母性を追求してきた谷崎文学は、『金瓶梅』という影を、ずっと細く長く引きずっていた。

バウハーフエン著の『母権論』から強く影響されたユングの深層心理学からみれば、谷崎文学における『金瓶梅』という影は、谷崎にとって生きられなかった夢であった。つまり、谷崎のインセストイとフェティシズムも、普遍的な母なるものとの合体として象徴的に使われているという深層心理学的なレトリック解釈ができる。谷崎は、殷王朝から印度を経て日本にやってきた元祖、纏足の姐己という妖婦を、古支那母系社会の象徴として、自分の小説のなかで再発酵させ、神話として作り上げたかったのだろう。しかし、日本に渡ってきた纏足していない狐という神話は、谷崎文学に於いてもはっきり釈明しにくい矛盾に陥っていて、ついに変体という罵名を避けられなかった。

第3会場(501)

趙夔羅

ジュール・ヴェルヌの戦時期的受容 — 子ども向け〈海洋冒険物語〉との比較を中心に —

ジュール・ヴェルヌは、近代日本の翻訳文学を考える際欠かせない作家であり、また戦前までの翻訳児童文学を代表する作家の一人でもある。特に戦時期のヴェルヌは〈海国〉〈科学〉などのスローガンの下、主に〈少年読物〉として多くの作品が紹介されており、戦争とヴェルヌ紹介のピークが結びついていることは先行研究でもすでに指摘された通りである。戦前までのヴェルヌ翻訳の原本はまだ明らかにされていないものが多く、ヴェルヌ翻訳研究の重要な課題となっているが、その際問題とされるのは主に西欧テキストの日本語への〈翻訳〉である。しかし児童文学という観点からヴェルヌ翻訳を考えるなら、戦時におけるヴェルヌ紹介には、他言語から日本語への〈翻訳〉問題だけではなく、先行する邦訳テキストの〈書き直し〉も重要な問題となってくる。以上のことから本研究では、ヴェルヌ翻訳テキスト間の影響関係に焦点をあて、〈書き直し〉という観点から戦時下の〈海洋冒険物語〉について考察する。

劉婉明

日中戦争時期文求堂の経営研究

近代の交通と人的往来の発展は、日中を跨ぐ「書籍場」の基礎となった。ここには「書勢」(書籍出版・伝播の動向)・「文勢」(文化学術界の動向)・「政勢」(政治環境の動向)の三勢力が存在した。「書勢」は「文勢」を反映すると共に「文勢」に影響し、「政勢」は「文勢」「書勢」に影響し、「文勢」「書勢」は時に「政勢」に対抗した。三者の関係は「書籍場」の動向を左右し、それは東アジア伝統文化の近代化として現れた。「東洋学の岩波書店」を標榜した文求堂の田中慶太郎はこの「書籍場」の到来を鋭敏に意識し、政界・学界・財界の人脈と文化資本を利用し、三「勢」の正確な把握を通じ、文求堂を東アジア「書籍場」における要とした。日中戦争時期、「書籍場」は政治の圧力を受けたが、文求堂は、1. 中国の書商・文人との交流保持、2. 若手研究者の支持及び影響、3. 戦時国家統制政策への対応、によりこれに対処し、伝統の転化と言えるもの

であった。

林姿瑩

大岡昇平の戦記物における「幸福」について—同時代作品との比較を視野に—

大岡昇平(1909-88)は自分の戦争体験をもとにした作品でデビューした作家である。彼の戦記物には幸福や不幸を描いた箇所がいくつかあり、初出を単行本に編集したとき、これらの箇所に多少手を加えたことは興味深い。戦争に巻き込まれた人間を「幸福」や「不幸」という観点で捉えて描いていく傾向があると言える。

このような「幸福」の観点は、まずスタンダールからの影響ではないかと思われる。スタンダールは「幸福」という言葉を頻繁に使う作家として有名であり、ベイリスム(Beylisme)という造語までもある。大岡はスタンダールの研究者・翻訳者でもあった。1947年からスタンダールの翻訳が盛んになり、一時的にブームになったため、戦争直後で社会が混乱している状態とは対照的に、スタンダールのベイリスムは目立つものであっただろう。

一方、同時代作品として坂口安吾の「続墮落論」(1946)を見てみると、「真の人間の幸福」というのが論じられ、梅崎春生の「蜆」(1947)にも「日本人の幸福の総量は極限されてんだ」という文章が見られる。また、太宰治には「家庭の幸福」(1948)という作品がある。以上のように、こうした「幸福」に関する表現は偶然ではないかもしれない。本論は大岡昇平の戦記物における「幸福」に関する描写を出発点として、同時代の作品は何故「幸福」を描写するのか、またいかに描写しているのかについて検討してみたい。

陳童君

堀田善衛『歴史』論—「上海シリーズ」最終篇の方法と射程

敗戦後、一連の「上海もの」を書きつづけていた堀田善衛は、1952年から1953年にかけて彼の「上海シリーズ」の最終篇として長編小説『歴史』を発表している。最終的に原稿用紙八百枚を費やしたこの作品は、中国政府に「留用」された日本人主人公の竜田をはじめ、十人以上の視点人物を同じ戦後上海の舞台に登場させ、革命前夜の中国の風景を多様な角度から描いている。この野心的な長編は堀田が敗戦後に執筆した最も膨大な作品のみならず、文学史のなかでも中国を題材とした「戦後最大の政治小説」(『物語戦後文学史』)の一つとして位置づけられ、いわば堀田善衛の敗戦後文学の一つの到達点を意味する。本発表は、作者の未発表の創作ノートの記事を参照しながら、『歴史』に対して一つの評釈を試みる。そのために、まずは、作品の創作方法とテキストの生成過程を確認し、そのうえで、作者の問題意識と、「上海シリーズ」最終篇としての『歴史』の射程を明らかにしたい。

アギー・エヴァマリア

太平洋戦争下に抵抗は存在したか—秋山清の『白い花』を中心に

加藤周一『抵抗の文学』(1951)は、ナチ占領下のフランス文学者の抵抗を日本に紹介したものである。この書をきっかけに、太平洋戦争下日本における文学者の抵抗が論じられることになる。戦後の雑誌『新日本文学』の中心的存在であった詩人壺井繁治の戦時中の作品に、小田切秀雄は、最低限に抵抗したと評価したが、同じ壺井を吉本隆明は55年に開始された「文学者の戦争責任」論争で厳しく批判した。吉本は、戦時下に雑誌『文化組織』に拠っていた花田清輝とも「抵抗」と「転向」をめぐる激しい論争を行ったが、この際の吉本の主張は、「戦時下日本で抵抗は存在しなかった」というものであった。しかし吉本は、詩人秋山清の詩集『白い花』(1966)の解説においては、金子光晴と秋山に「抵抗詩人」の評価を与えてもいる。

このように見るとき、太平洋戦争下の「抵抗(詩人)」像は、いまだ確たるものとはなっていない。吉本は、秋山『白い花』にどのような「抵抗」を見出したのか。秋山の抵抗とはいかなるものだったか。抵抗は果たして存在したのか。本発表は、秋山の抵抗詩集と呼ばれる『白い花』を、個々の作品にそって検討・読解することで、抵抗詩および抵抗詩人のひとつの像を提出することを試みるものである。

第4会場(502)

ガブラコヴァ・デンニツァ

主権の島々—有吉佐和子『ぷえるとりこ日記』及び池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』

本発表では、二人の異なる時期の日本戦後文学・現代文学の作家による狭義の意味における政治の小説家を論じたい。有吉佐和子と池澤夏樹がそれぞれ『ぷえるとりこ日記』、『海暗』及び『マシアス・ギリの失脚』において、異なる地理的な地域、異なる文体、異なるレベルの虚構性を提示しているため、本発表は比較研究などを狙わない。同時に両作家の作品を読み進むことによって浮き彫りにできる日米関係が背景に揺れ動く(内なる)「第三世界」、およびその小説的な再現に光を当てる。有吉はカリブ海の島、後に日本列島の離島の空間を、池澤は太平洋のミクロネシアの島嶼国家の空間を再現する際に、多角的にその領域の統治者像が介入され、周辺的な政治的空間が焦点に据えられる。言説的な複線として、妊娠・避妊・出産などの主題が両方の場合に備えられることにより、再生産における管理及び性と政の表象も問われることになる。両作家における共通した「島」への想像力を媒介に、日本現代文学における「第三世界」との関わり、及びポストコロニアル批評の領域への接続を探ることができる。

時渝軒

批判と小説の間——大江健三郎『憂い顔の童子』論

大江健三郎の『憂い顔の童子』(講談社、2002)に関する先行研究の傾向として、『「おかしな二人組」三部作』(講談社、2006)における二人組の構造という連続性や一貫した主題から、論を展開するのはほとんどである。だが、統一性のみを重視するこれらの論説は作品間の変異と独自性、つまり各作品の内的完結性を無視しているといわざるを得ない。

「わしは自分が何者であるか、よく存じておる」と、ドン・キホーテが答えた」という一文をエピグラフとして引用する『憂い顔の童子』はこのエピグラフが提示した構造によって書かれている。すなわち、「」内に括る言葉通り、『憂い顔の童子』は「童子物語」、「古義人小説」などの自分の文学に関する再解釈と文芸批評を反論する古義人の言説によって、新たな「わし」＝自分を構築するテキストなのである。同時に、「」外に続く文は「」内で行った批評に対する反論を終始古義人＝「ドン・キホーテ」の冒険譚という物語構造の内に統合している。本発表は、批判対反批判によって、自分の作品を書き直しながらも、決して小説という枠組を放棄しない係争の場として『憂い顔の童子』のテキストを考察したい。

康潤伊

「超える」と「解く」のあいだに —柳美里『8月の果て』における〈恨(ハン)〉と少女—

『8月の果て』(新潮社、2004年8月)は家族と民族の物語として読まれてきたが、こうした家/民族を結合させた評価は、柳美里が自分を仮託して描く少女の系譜を見落としてきた。しかしそれは本作品にも、密陽の精・阿娘と強いられて「慰安婦」にされた英姫に見られる。『8月の果て』に取り入れられている巫俗儀式が、〈恨〉を解くために女性たちが行うものであることを踏まえれば、作中の女性たちの〈恨〉は注目に値する。

柳は一貫して「〈恨〉を超える」という表現を用いているが、一般的には「解く」でありこれは特殊な用法と言える。本発表ではこれに着目し、『8月の果て』に登場する女性たちの中でも、作者自身が投影された少女たちとそれを描く柳の〈恨〉とその「超え方」を考察し、柳美里作品における新たなエスニシティとその表象を探っていきたい。こうした手続きは「在日朝鮮人文学」における「家族と民族」という読みのコードをも問い直していくものとなるだろう。